

願前にカレッジのカウンセラーに、自分の成績を持って、UC への転入学の可能性について質問に行きました。「いくつかのキャンパスは大丈夫。でも、競争の厳しいキャンパスはチャレンジ」との回答が得られました。

この回答に気をよくしたのか、ヒロ君、熟慮の結果（？）、なんと、CSU への出願はしないで、UC の、それも上位 5 キャンパスだけに出願してしまいました！（私は日本！）

目標は高いほど良い、というものの！？ あとは、入学許可の厚い封筒が届くのを待つだけです。

専攻：何を学ぶの？

話が前後しますが、出願・合格には、学部選びも大切です。

ヒロ君、カレッジ入学時には、将来、日米両国に関わる自分のビジネスを開きたいという希望があり、ビジネス・経済関連の学部が希望でした。

しかし、カレッジでの勉強や学生としての経験を経て、「自分は外国生まれのアメリカ育ちなので、日本のことがよく分かっていない。転入学する大学で勉強できるのは 2 年間しかないの、将来の希望である日米間のビジネスの背景となる日本を含めたアジアの国々の社会について集中して学びたい。ビジネスのことは、そのあと時間をかけて経験していきたい。」とのことで、専攻の学部を「東アジア」の文化や社会を学べる学部中心に、志望を変えました。

厳しい大学の状況

現在、アメリカの経済は最悪で、カリフォルニア州の財政も危機的な状況にあります。州立大学は、州政府からの財政支援で成り立っていますので、その影響をまともに受けています。今後 2 年間に 30% 近い授業料の値上げに加えて、入学定員の大幅削減も検討されています。

ヒロ君が出願したキャンパスの入学定員も明確に発表できないのが現状のようです。大学はこのような厳しい状況にありますが、11 月末に出願を終えたヒロ君は、3 月頃の発表を待つだけしかできません。

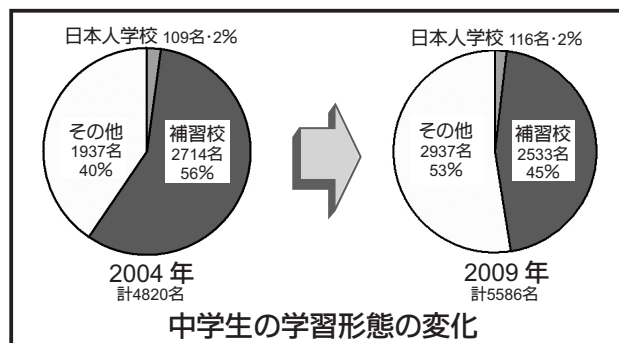
☆

「この冬休みに、日本と台湾を 1 ヶ月かけて見聞してきます。」こう言い残して、ヒロ君、生まれて初めての一人旅に出かけています。ヒロくんは、大きな収穫を得て帰ってくるでしょう。

帰ってくると、カレッジ最後の学期がすぐに始まります。この学期にとんでもない成績を取ってしまうと、合格が取り消されることもあります。気を抜くわけにはいきません。

ヒロ君のチャレンジは、まだ続きます。

北米の日本人の子ども、何人くらい？ 日本語で勉強しない中学生が増加？



このグラフは、外務省の調査結果（10 ページ）を元に、過去 5 年間の中学生の学習形態を比較したものです。

5 年間の在籍数の変化をみると、①中学生全体で 766 名（16%）増加、②補習校在籍者が約 200 名減少、③「その他」が 1,000 名増加、④日本人学校在籍者は変わらない、となっています。その変化は、「5 年間の中学生の増加分と補習校在籍者の減少分が、『その他』の増加分となった」と、まとめることができます。

「その他」には「私立の日本人学校」と「不就学」の中学生が含まれますが、これらの数の変化は少ないと思われるので、「現地校のみで勉強している中学生の数が増えている」と、解釈できます。

（ちなみに、この 5 年間に小学生は約 70 人しか増えていませんので、中学生が大幅に増加していることになります。）

この中学生の変化を示すケースを少し考えてみましょう。

まず、補習校をやめて日本語での勉強は「塾」で、というケースです。確かに大都市では補習校には行かないで塾だけに通っている子どもがいますが、塾関係者の経営困難の話から判断すると、全体的に多いとは考えられません。

もうひとつは、日本語での学習をあきらめて、現地校の英語での勉強だけに切り替えてしまった子どもです。8・9 年生の勉強が質量ともに難しくなることから理解できます。

最後は、英語力や英語での学力向上を最優先して、渡米時から日本語での学習を行わず、現地校での学習のみに集中しているグループです。

あとの二つのケースは、長期滞在や永住予定の家庭教育の代表的な考え方です。「長期滞在や永住の子どもが増えている」との補習校関係者の言葉の影響が、北米の中学生の最近の変化を反映しているのでしょうか？（松本）